

# マーケティング研究におけるケース・スタディの方法論

著者	Shibuya Satoru
雑誌名	『マーケティング科学の方法論』 第6章
ページ	111-139
発行年	2009-04
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/49313">http://hdl.handle.net/10097/49313</a>

## 第6章 マーケティング研究におけるケース・スタディの方法論 東北大学 澁谷 寛

(嶋口充輝監修, 『マーケティング科学の方法論』, 白桃書房, 2009年,  
pp. 111-139)

### 第1節 はじめに

本章では、ケース・スタディの方法論に関するいくつかのトピックについて議論する。ケース・スタディの代表的な教科書である Yin (1984)の主張を点検しつつ、関連する諸研究をとりあげる。まず第2節ではケース・スタディの定義と類型を提示し、続いて第3節ではデータ収集に先立つ事前の準備について検討する。

最後に第4節では、従来のケース・スタディの方法論における主要なトピックのひとつであった「ケースから得られる知見の一般化」という論点に関して、現象と文脈を識別する新たな枠組みを提案し、この枠組みを用いて従来の議論の整理を行う。また Yin が提示した「分析的一般化」に替えて、「文脈への一般化」という新たな方法を提示する。

### 第2節 ケース・スタディの定義と類型

#### 1. ケース・スタディの定義

ケース・スタディはさまざまに定義されてきた。1930年代末にいくつかの社会学系の学術誌においてサーベイ調査などの量的研究と質的研究とを巡る論争が展開された際、統計的手法などの量的研究方法と対置されて論じられた研究方法は一般に「ケース・スタディ」と呼ばれていた<sup>1</sup>。このことから、当初ケース・スタディは質的研究方法のひとつとして位置づけられていたことがわかる。Bonoma も「ケース・リサーチは質的データを扱い、かつフィールドワークにもとづいて構築される」<sup>2</sup>として、ケース・スタディ（ケース・リサーチ）を質的データにもとづく研究方法として位置づけている。他にも多くの研究者がケース・スタディを質的アプローチのひとつとして位置づけている<sup>3</sup>。これらはいずれも、扱うデータの種類によってケース・スタディを識別するものである。

一方 Leonard-Barton(1990)は、「ケース・スタディとは複数の情報源による証拠から引き出された過去または現在の現象に関する歴史である」<sup>4</sup>とし、Eisenhardt(1989)は「単一の状況設定におけるダイナミズムに焦点を当てる研究方策」<sup>5</sup>と述べた。これらはケー

<sup>1</sup> Mitchell (1983, p. 187)。

<sup>2</sup> Bonoma (1985, p. 199)。

<sup>3</sup> Gummesson (2002)、Smith (1989)、Zaltman, LeMasters and Heffring (1982) など。

<sup>4</sup> Leonard-Barton (1990, p. 249)。

<sup>5</sup> Eisenhardt (1989, p. 534)。

ス・スタディを研究対象によって識別している。

Yin は、ケース・スタディとは何かという定義は「この本全体にわたるトピック」<sup>6</sup>であるとして明確な単一の定義を提示していないが、「技術的定義」として「とくに現象と文脈の境界が明確でない場合に、その現実の文脈で起こる現在の現象を研究する」<sup>7</sup>ことに適した経験的探求方法であるとし、扱うデータの種類や研究対象によってケース・スタディを識別すべきでない<sup>8</sup>と述べた。

このような Yin の主張にもかかわらず、ケース・スタディの方法について述べた大半の文献において質的データに関する記述が大部分を占めていることに示されるように、現実的にはケース・スタディとは質的データに依拠した研究方法としての性格が強い。またその研究対象は何らかの時間的推移や経緯を伴うものやダイナミズムに関するものが多いように思われる。このような現状に対して、Yin による「技術的定義」は、ケース・スタディの質的データへの依存傾向や、歴史やダイナミズムなどへの着目傾向といった特徴を、研究対象である現象と背後の文脈とが未分化であることの結果としてもたらされるものと構造的に説明できるところが、その利点である。そこで本章では、Yin(1984)が提示した上記の技術的定義を、ケース・スタディの定義として暫定的に採用することにする。

## 2. ケース・スタディの種類

ケース・スタディには、さまざまな種類が識別されてきた。Eckstein(1975)は政治学の分野で用いられるケース・スタディを「構成・個性記述型」<sup>9</sup>、「理論適用・構成型」<sup>10</sup>、「理論生成型」<sup>11</sup>、「プレテスト型」<sup>12</sup>、「決定的ケース型」<sup>13</sup>の5つのタイプに分類し、ケース・スタディを用いた研究はこれらの順に進められるべきであると主張した<sup>14</sup>。

また Yin(1984)は、「探索的ケース・スタディ」、「記述的ケース・スタディ」、「説明的ケース・スタディ」の3種に類別した。

以下では、Yin(1984)による上記の識別類型に関して、さらに若干の考察を加える。

---

<sup>6</sup> Yin (1984, p. 19)。

<sup>7</sup> Yin (1984, p. 18)。

<sup>8</sup> Yin (1984, pp. 16-17)。

<sup>9</sup> Configurative-Idiographic Study : 予測や統制ではなく理解を目指して主体の個性を記述する。ケースを理論に照合することには関心がない (pp. 96-99)。

<sup>10</sup> Disciplined-Configurative Study : 理論をケースに当てはめてケース解釈・説明し、同時に理論へのフィードバックを行う。ケースから理論を構築することは目指さない(pp. 99-104)。

<sup>11</sup> Heuristic Case Studies : 理論構築のためのケース・スタディであり、ひとつ目のケースから仮説を生成し、2番目以降の複数ケースによる比較を通じて当該仮説の修正と検証を繰り返す (pp. 104-108)。

<sup>12</sup> Plausibility Probes : Heuristic Case Studies によって生成された仮説が本テストに耐えるかどうかの試験的テストを行う段階。競走馬がメジャーレースに参加する前の試走に例えられる(pp. 108-113)。

<sup>13</sup> Crucial-Case Studies : 理論を決定的に確証・反証するケース・スタディであり、よく設計された実験と同様の役割を果たす。ただし理想的な決定的ケースを見つけることは難しいため、次善のケース（「最もありそうな(most-likely)」または「最もありそうにない(least-likely)」ケース）を用いる場合も多い(pp. 113-123)。

<sup>14</sup> 各類型の名称は、Eckstein が提示したそれぞれのケース・スタディの内容に即して訳語をつけた。

### 2-1. Yin(1984)における記述的ケース・スタディと説明的ケース・スタディ

Yin(1984)は、記述的ケース・スタディについて、研究者が「ありのままを語る」ものであり、必要とされる理論、因果的結び付けや分析は、いずれもごくわずかである<sup>15</sup>と述べている。また説明的ケース・スタディについては、説明目的を追求するために用いられる<sup>16</sup>とし、主として「どのように、なぜ」を問う場合に用いられる研究方法として位置づけている。

### 2-2. Yin(1984)における探索的ケース・スタディ

これらと対照的に、探索的ケース・スタディについて Yin はその明確な定義を提示しておらず、単に「何が」の問題を問う場合に適する研究方法であるとだけ述べている<sup>17</sup>。また、これとは別に説明的ケース・スタディに関しては、「単なる探索（あるいは記述）目的ではなく説明目的を追究するために用いることができる」<sup>18</sup>と述べている。これらから、Yin は説明的ケース・スタディと記述的および探索的ケース・スタディとを対比していることがわかる。すなわち Yin によるケース・スタディの識別類型においては、「説明的か（説明的ケース・スタディ）、そうでないか（記述的ケース・スタディおよび探索的ケース・スタディ）」というひとつの軸が存在しているように思われる。

一方で Yin(1984)は、Glaser and Strauss(1967)による仮説創造を目的とするケース・スタディを「探索的ケース・スタディ」として位置付けている<sup>19</sup>。一般に Glaser and Strauss(1967)において提示された「グラウンデッド・セオリー」は、理論構築のための代表的枠組みとして理解されており、説明的な目的をもつ研究方法である。このことから Yin の識別類型においては、「探索的かつ説明的」という類型が存在すると考えることができる。このように Yin が提示したケース・スタディの3つの類型には、相互に重複する部分があり、やや未整理の面があるように思われる。

### 2-3. 本章における暫定的なケース・スタディの類型

以上の検討で明らかになった Yin によるケース・スタディの識別類型における重複部分については、（1）説明的かそうでないか、および（2）探索的かそうでないか、というふたつの直行する軸が根底において仮定されていたと考えることによって、これを整理することができる。

そこでまず本章では、（1）の軸（説明的かそうでないか）において、説明的ケース・スタディに対比される類型を、以後は記述的ケース・スタディと呼ぶことにする。

---

<sup>15</sup> Yin (1984, p. 132, ボックス 22)。

<sup>16</sup> Yin (1984, p. 6, ボックス 2)。

<sup>17</sup> Yin (1984, p. 6)。

<sup>18</sup> Yin (1984, p. 6, ボックス 2)。

<sup>19</sup> Yin (1984, p. 148)。

次に（２）の軸（探索的かそうでないか）について検討する。探索的(exploratory)という概念に関しては、これを最初に社会科学に導入したのは Glaser and Strauss(1967)であった<sup>20</sup>。Glaser らによって提示されたグラウンデッド・セオリーの方法論においては、事前に確立された仮説や理論をもたずに現場に密着したデータを収集し、そこから理論を浮上させる<sup>21</sup>。「探索的研究」とはこのようなやり方を意味する。したがって探索的ケース・スタディと対比されるケース・スタディの類型があるとすれば、それは事前に明確に確立された仮説や理論をもって開始されるケース・スタディを意味すると考えることができる。このようなケース・スタディは、その仮説や理論を検証することを目的とする<sup>22</sup>。したがって本章では、以後この類型を検証的ケース・スタディと呼ぶことにする。

すなわち Yin によるケース・スタディの類型においては、（１）探索的か検証的か、（２）記述的か説明的か、という直行するふたつの軸が想定されていたと考えることができる。

以上から、本章では図表 1 に示されるようなケース・スタディの類型を暫定的に提示したい。

図表 1 ケース・スタディの類型

	探索的	検証的
記述的	(1)	
説明的	(2)	(3)

### （１）探索的・記述的ケース・スタディ

このタイプのケース・スタディの目的は、ある現象の原因などを説明することではなく、あくまでもその現象を記述することにある<sup>23</sup>。記述とは、出来事の解釈に立ち戻ったり、なぜそれが生じたのかという説明に戻ったりすることを行わず、ただ描写すること、すなわちストーリーを語ることを意味する<sup>24</sup>。そしてその目標は、さらに探究を進めるための適切な仮説と命題を開発することである<sup>25</sup>。

（１）の類型では、このような記述的ケース・スタディを、探索的に行う。Yin(1984)は、探索的ケース・スタディの典型的なリサーチ・クエスチョンとは「何が」を問うことであると述べている<sup>26</sup>。また Hage は、「理論にとりかかるもっとも簡単な方法は、関心

<sup>20</sup> Stebbins (2001, p. ix)。

<sup>21</sup> Glaser and Strauss (1967, p. xi, pp. 42-49)。

<sup>22</sup> Glaser and Strauss (1967, p. 37)。

<sup>23</sup> 坂下 (2004, p. 23)。

<sup>24</sup> Strauss and Corbin (1990, p. 35)。

<sup>25</sup> Yin (1984, pp. 7-8)。

<sup>26</sup> Yin (1984, p.7)。

のある社会現象を記述するいくつかの理論概念を探索することである」<sup>27</sup>と述べ、ふたつ以上の理論概念を関係づけることによって記述は説明や予測に用いることができるようになる<sup>28</sup>と主張した。このように Hage は、先に見た Eckstein と同様に、探索的・記述的研究を、理論構築のためのケース・スタディの前段階として位置付けている。この立場を支持するならば、「何が」起きているのか、というようなきわめて原初的な問いかけから開始され、いずれは何らかの説明の開発へと進められる研究においては、この類型に識別されたような探索的かつ記述的なケース・スタディから取りかかるのも、ひとつの選択肢であるということができよう。

なお、理論や仮説とは何らかの現象を説明するものであるから、理論や仮説の検証を目的とするケース・スタディが説明的でない（すなわち記述的である）ことはあり得ない。したがって検証的・記述的ケース・スタディという類型は存在しないと考える。すなわち記述的ケース・スタディとしては探索的・記述的ケース・スタディしか存在しない。そこで、以後この類型を本章では「記述型ケース・スタディ」と呼ぶことにする。

## （２）探索的・説明的ケース・スタディ

この類型の特徴は、探索的であること、すなわち事前に何らかの前提や確立された命題や仮説をもたずにケース・スタディを開始すること<sup>29</sup>、および説明的であること、すなわち現象における「どのように」、「なぜ」といった説明の開発を目指すこと<sup>30</sup>である。このようなケース・スタディの方法においては、すでに確立された理論（グラウンド・セオリー）を検証するのではなく、現実のデータと対話しながら浮上してくる現実的な理論（グラウンデッド・セオリー）の構築を目指す Glaser and Strauss(1967)によるグラウンデッド・セオリーの方法論が代表的なものと考えられる。実際に Eisenhardt(1989)は、ケース・スタディの方法論に関する諸研究の中で、理論構築に焦点を当てて論じたものは Glaser and Strauss (1967)を除いてはほとんど見られないと述べている<sup>31</sup>。

そこで、この類型のケース・スタディを「理論産出型ケース・スタディ」と呼ぶ。

## （３）検証的・説明的ケース・スタディ

この類型のケース・スタディでは、理論構築よりも既存の理論の検証に主たる目的を置く。Yin(1984)は、複数のケースによって理論をテストすることを実験になぞらえて「追試」と呼び、複数ケースにおいて追試がなされれば、その理論ははるかに多くの類似のケースにおいて受け入れられると考えることができるため、一般化可能性が高まると主張し

---

<sup>27</sup> Hage (1972, p. 12)。

<sup>28</sup> Hage (1972, p. 43)。

<sup>29</sup> Miles (1979, p. 591)。

<sup>30</sup> Yin (1984, p. 8)。

<sup>31</sup> Eisenhardt (1989, p. 546)。

た<sup>32</sup>。このようなケース・スタディによる理論の検証について述べた研究の例としては、4 から 10 の複数ケース・スタディによる検証が望ましい<sup>33</sup>とした Eisenhardt(1989)をあげることができる。これに対して Dyer and Wilkins(1991)は、Eisenhardt の主張は理論産出を目的とすると表向きは主張しているにもかかわらず、実際には理論の検証に偏った主張である<sup>34</sup>として批判した。

ケースによる理論の検証に関しては、Yin は単一ケースが重要な理論の決定的なテストになり得ることを主張した<sup>35</sup>。また先に見た Eckstein(1975)においても、理論や仮説の決定的テストとなるケース・スタディの類型が示されていた<sup>36</sup>。これらの先行研究から、ケース・スタディには、仮説検証または理論のテストを主たる目的とする類型が存在すると考えることができる。無論このような類型もまた、説明的でない（記述的である）ことはあり得ない。そこで、このような類型を検証的・説明的ケース・スタディとして位置付けて図表 1 の（3）に分類し、これを「理論検証型ケース・スタディ」と呼ぶことにする。

以上より、本章におけるケース・スタディの分類として、図表 1 の各類型に対して、以下の図表 2 のように名称を付与することにする。

図表 2 ケース・スタディの類型

	探索的	検証的
記述的	記述型 ケース・スタディ	
説明的	理論産出型 ケース・スタディ	理論検証型 ケース・スタディ

なお、本節第 2 項で見た Eckstein(1975)の主張と同様に、以上の類型のケース・スタディを「記述型ケース・スタディ」、「理論算出型ケース・スタディ」、「理論検証型ケース・スタディ」の順に進めることが望ましいと考える。

### 第 3 節 ケース・スタディの事前の準備

本節では、ケース・スタディにおけるデータ収集に先立つ事前の理論や仮説の準備についてのトピックをとりあげ、考察する。

<sup>32</sup> Yin (1984, p. 50, p. 61)。

<sup>33</sup> Eisenhardt (1989, p. 545)。

<sup>34</sup> Dyer and Wilkins (1991, p. 613)。

<sup>35</sup> Yin (1984, p. 55, ボックス 8)。

<sup>36</sup> Crucial-Case Studies (Eckstein, 1975, pp. 113-123)。

## 1. 白紙の状態からの理論産出

ケース・スタディの方法論に関する論点のひとつに、事前の準備をどのように行うかという点がある。この論点について早い時期に明確な立場を表明した **Glaser and Strauss(1967)**は、研究者が調査に先立ってあらかじめ考案した理論や概念、仮説などをもつことは、現場で得られるデータをこれらの理論に無理矢理あてはめてしまう結果につながるため、理論産出にはデメリットが大きいことを強調し、「調査に先立って概念や仮説における『関連性』を押しつけてくるような、あらかじめ考案された理論などひとつもなしに、ある領域を研究するというのもまたできるわけだし、われわれはそうすべきと信じている」<sup>37</sup>と述べた。つまり **Glaser** らは、理論産出のためにはいわば白紙の状態ですらデータ収集に臨むことを主張したのである。

この主張の背景には、社会学における理論検証への過度の偏りへの危機感と、いわゆる観察の理論負荷性の問題とが、相互に絡み合っている。理論負荷性の問題とは、観察結果が観察者の有するアプリオリな知識のコンテキストにおいて翻訳される傾向があること<sup>38</sup>を指しており、この問題に関して **Kuhn** は、「人間に見えるものは彼が見たものだけではなく、彼の既成の視覚的概念的経験が彼に見るように教えるものによっている」<sup>39</sup>と述べた。理論負荷性の問題に関して **Glaser** らは、「理論をもって実例の調査にあたる場合には、実例は理論を確認する根拠として用いることができるものだけが選択されてしまい、証拠がないのに証拠があるかのようなイメージがもたらされ、結果として理論が本来はもっていない細部の豊かさを獲得してしまう」<sup>40</sup>と述べ、事前に理論をもって調査にあたる従来の方法に対して痛烈な批判を行った。理論負荷性の問題によって、社会学研究が、より容易に既存理論の誤った検証に偏ってしまうことに対する **Glaser** らの大きな危機感をここから読み取ることができる。

## 2. 事前の作業枠組み

以上のような **Glaser** らの主張に対して、**Miles** は実際に何の前提もおかずにデータ収集に取り組むと、大量の無関係で意味のない観察データが産み出されてしまう<sup>41</sup>ことをあげ、フィールドワークの現実的実践におけるリスクとして、**Glaser** らが主張した理論負荷性の問題よりもこの問題の方がより困難であると述べた<sup>42</sup>。その上で **Miles** は、データ収集を開始する前に、大まかな作業枠組みを準備することが必要だと主張した。同様に、

<sup>37</sup> Glaser and Strauss (1967, p. 46)。

<sup>38</sup> Anderson (1983, p. 27)。

<sup>39</sup> Kuhn (1962, p. 127)。

<sup>40</sup> Glaser and Strauss (1967, p. 6)。

<sup>41</sup> この問題点に関する同様の懸念は、Eisenhardt (1989, p. 536)、Hunt (1976, p. 34)、Leonard-Barton (1990, p. 261)、Pettigrew (1990, p. 281)、Yin (1984, p. 32) 等にも見られる。中でも「データによる窒息死(death by data asphyxiation)」(Pettigrew, 1990, p. 281)という表現は、しばしば引用される。

<sup>42</sup> Miles (1979, p. 591)。



事前にある程度の枠組みを準備することの必要性を主張したものとして、Bonoma(1985)をあげることができる。Bonomaは、ケース・スタディの開始にあたって、まず現象を大掴みに把握する「ドリフト段階」において、現場にどっぷりと浸かることによって、既存研究や現象に関するアプリアリな考え方を予備的に統合し、より良いパースペクティブを得ることができると述べた<sup>43</sup>。

### 3. 事前の問いと理論開発

#### 3-1. 事前の問い（リサーチ・クエスチョン）

このような事前枠組みの準備を主張する立場と、白紙でケース・スタディに臨むべきとする立場とは別に、事前のリサーチ・クエスチョンを用意することの必要性を主張する立場がある。Yin(1981)は、リサーチ開始前に60問程度の自由回答式の質問リストを作成し、研究者がこれに回答を記入しつつケース作成を進める方法を提案した<sup>44</sup>。Eisenhardtもまた、事前に関しリサーチ・クエスチョンを決めておくことによりリサーチの焦点を定めることが必要であると述べた<sup>45</sup>。しかし他方でEisenhardtは、Glaser and Strauss(1967)に近い立場をとり、あらかじめ理論や仮説をもたない理想的なクリーンな状態でリサーチをスタートすることがもっとも重要である<sup>46</sup>と述べている。このことから、事前のリサーチ・クエスチョンを準備することと、事前に何らかの仮説や理論を準備することとを、Eisenhardtは明確に識別していたことがわかる。

#### 3-2. 事前の理論開発

Yin(1984)は、上に述べたYin(1981)の60の事前の質問の主張をさらに進めて、ケース・スタディにおいてデータ収集に先立つ理論開発は不可欠のステップであるとし、研究対象に対する理論命題を包含する完全なリサーチ設計を準備すべきと述べ、厳密でシステムティックなケース・スタディの方法論を提示した<sup>47</sup>。

### 4. 本節の結論

以上に見てきたように、ケース・スタディのデータ収集に先立ってどの程度の事前の準備を行うかという点に関しては、一見論者により意見はさまざまであるように思われる。この点に関して、以下のふたつの点を指摘しておきたい。

#### 4-1. Glaser and Strauss(1967)におけるシンボリック相互作用論の影響

第一に、Glaser and Strauss(1967)が提唱したグラウンデッド・セオリーの方法論にお

---

<sup>43</sup> Bonoma (1985, pp. 204-205)。

<sup>44</sup> Yin (1981, p. 60)。

<sup>45</sup> Eisenhardt (1989, p. 536)。

<sup>46</sup> Eisenhardt (1989, p. 536)。

<sup>47</sup> Yin (1984, pp. 39-40)。

けるシンボリック相互作用論の影響という点である。Strauss は、1960 年代半ば以降の最も代表的なシンボリック相互作用論者の一人であり<sup>48</sup>、Strauss 本人もシンボリック相互作用論を自らの出自として認めている<sup>49</sup>。

シンボリック相互作用論の基本的な前提は、「(1) 人間は、ものごとが自分に対してもつ意味にのっとして、そのものごとに対して行為する。(2) このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する。(3) このような意味は、個人が自分の出会ったものごとに対処する中で、その個人が用いる解釈の過程によって扱われたり、修正されたりする」<sup>50</sup>というものである。グラウンデッド・セオリーの方法論を用いる研究者は、話し手がインタビューをどう意味づけるかによって、またインタビューの場における話し手と聞き手との相互作用の状態によって、得られるデータの内容は異なるという立場に立ってデータ収集や分析を行うが<sup>51</sup>、この立場が基本的にシンボリック相互作用論の前提に沿ったものであることは明白である。

すなわち、白紙の状態に現場に臨むことを推奨した Glaser and Strauss であったが、実際には彼らはシンボリック相互作用論という確固とした理論枠組みを背負って現場に臨んでいたと考えることができる<sup>52</sup>。

このことは、マーケティング研究へのグラウンデッド・セオリーの応用を検討する上では重要である。グラウンデッド・セオリーの方法論の現在の主要な実践領域は、社会福祉、介護福祉、地域看護、老人看護、作業療法、臨床心理、学校保健、保健医療社会学であり<sup>53</sup>、特に看護学を中心とした領域では近年このアプローチにもとづく研究が増加傾向にある<sup>54</sup>。しかし他方では、これら以外の領域ではこのアプローチにもとづくめぼしい研究が見あたらないこと<sup>55</sup>や、Strauss 自身が医療社会学の代表的な研究者であったこと<sup>56</sup>を考え合わせれば、グラウンデッド・セオリーという方法論は、主として患者や医師に対するインタビューによって収集したデータの分析を通じて理論を産出するという方法をとる看護研究の分野にこそ、もっともよくあてはまる研究方法である可能性がある。

このことが、ただちにマーケティング領域におけるケース・スタディにおいて、この方法論が適さないことを意味するわけではないとしても、少なくともわれわれは、Glaser らが述べた「白紙の状態」でデータ収集を開始するのが理想的という表現を、そのまま額面通りに受け取るべきではないと考える。

---

<sup>48</sup> 藤澤 (1995, p. 61)。

<sup>49</sup> 森岡 (1999, p. 364)。

<sup>50</sup> Blumer (1969, p. 2)。

<sup>51</sup> 戈木グレイヒル (2005, p. 22)。

<sup>52</sup> ただし Strauss は、グラウンデッド・セオリーにもとづく研究を行うために、必ずしもシンボリック相互作用論者である必要はないと繰り返し主張している(森岡, 1999, p. 364)。

<sup>53</sup> 木下 (2005, p. 17)。

<sup>54</sup> 森岡 (1999, p. 365)。

<sup>55</sup> 佐藤 (1992, p. 74)。

<sup>56</sup> 藤澤 (1995, p. 61)。

#### 4-2. 事前の準備と単一ケースおよび複数ケース

第二に、本節で検討したデータ収集に先立つ事前の準備についての諸見解のうち、事前の準備を否定する立場に関しては、これが単一ケースによるケース・スタディを実施する場合にのみあてはまる議論であるという点である。なぜなら、複数ケースによるケース・スタディを行う場合には、最初に実施されたひとつ目のケース・スタディにおいて得られた何らかの示唆や発見が、2番目以降に実施されるケース・スタディにおける仮説やリサーチ・クエスチョンとして反映されるのであり<sup>57</sup>、したがって2番目以降に実施されるケース・スタディにおいては、事前の仮説やリサーチ・クエスチョンは必然的に準備されていることになるからである。

#### 4-3. まとめ

以上のふたつの論拠から、本章では白紙の状態データ収集に臨むべきとする見解については、これを採用しない。そもそもマーケティング研究においてケース・スタディを実施する場合には、「なぜこの商品はこんなに売れたのか」、「なぜこの企業は短期間にこれほど売上げを伸ばしたのか」など、少なくとも何らかの漠然としたリサーチ・クエスチョンが設定されている場合が多いと思われる。さらにいえば、単なる漠然としたリサーチ・クエスチョンのみならず、「顧客とのリレーションシップが巧みに構築されているから、この商品はこれほど売れたのではないか」<sup>58</sup>などの、何らかの大まかな仮説（理論言明<sup>59</sup>）をもってケース・スタディに臨むことも多いであろう。

このような現実面から考えても、そして本章で検討した方法論の側面から考えても、マーケティング研究におけるケース・スタディの実施に際しては、事前に何らかの大まかな仮説や作業枠組み、または漠然としたリサーチ・クエスチョンなどを準備してからデータ収集に臨むことが妥当であると思われる。

### 第4節 ケース・スタディからの一般化

#### 1. ケースの典型性による一般化と論理による一般化

##### 1-1. ケース・スタディからの一般化に関する議論

1930年代から社会学者たちの間ではたびたびケース・スタディの方法論に関する議論が展開されてきたが<sup>60</sup>、この議論においてケース・スタディの方法を用いた研究に関する根本的な問題とされた点は、単一の事例からの一般化をどのように正当化するのかという

<sup>57</sup> もしこのように反映させずに、すべてのケース・スタディを白紙の状態から開始するのであれば、複数ケースによるケース・スタディを実施する意味がないであろう。

<sup>58</sup> この例は因果的説明(Hunt, 1976, pp. 90-96)である。

<sup>59</sup> Hage (1972, pp. 43-44)。ここで Hage は、理論言明とはふたつ以上の概念を関係づけて説明や予測に関する言明としたものであり、仮説とは確証されていない理論言明であると述べている。

<sup>60</sup> Mitchell (1983, p.187)。

問題であった<sup>61</sup>。この問題は当時「ケースの典型性の問題」としてしばしば表現された<sup>62</sup>。すなわち、ケース・スタディから得られた知見は、そのケースが「典型的」でない限り、他のケースに関して有効とはいえないという指摘が、長らくケース・スタディに対して提出されてきたのである<sup>63</sup>。

このような、ケース・スタディからいかにして一般化可能な推論を導き出すことができるかという論点に関して、中心的な関心を寄せたのが Znaniecki(1934)や Robinson(1951)、Mitchell(1983)、Silverman(1985)らであった<sup>64</sup>。ケース・スタディの手法を用いる研究者に対してしばしば投げかけられる「選択されたケースが代表的なものであるかどうかをどのようにして知るのか」という質問<sup>65</sup>に対して、Mitchell は「統計的推論」と「論理的推論」とを対比した上で、ケース・スタディでは後者の推論を用いるべきとして回答した<sup>66</sup>。すなわち Mitchell は、「ケースの代表性」という問いは統計的推論を前提としたものであるが、ケース・スタディには論理的推論を用いるべきであるから、ケース・スタディに対してこのような質問を投げかけること自体が誤りであると主張したのである。

## 1-2. Znaniecki (1934) の「分析的帰納」

Mitchell が以上の主張を展開する上で依拠した Znaniecki(1934)は、早い時期に「列举的帰納」（およびこの方法の改良版としての「統計的方法」）と「分析的帰納」を対比した上で、社会学において知見を一般化するには、従来唯一の社会学的方法として用いられてきた列举的帰納<sup>67</sup>ではなく、分析的帰納の方法を用いるべきと主張した<sup>68</sup>。Znaniecki によれば、列举的帰納とは事前にある論理的種類を定義し、その定義にあてはまる多くの事例に共通した知見を見いだそうとする方法である<sup>69</sup>のに対して、分析的帰納とは少数の事例を徹底的に分析した上で、そこから得られる知見を抽象化し、これらの事例がいかなる論理的種類を代表しているのかを考察する方法である<sup>70</sup>。Znaniecki は、「(分析的帰納とは) 所与の具体的事例から本質的な性格を抽象して、それを一般化し、本質的である限りそれらの性格は多くの事例においても類似しているにちがいない、というふうに推定する

<sup>61</sup> Smith (1989, p. 55)。

<sup>62</sup> Mitchell (1983, p. 189)。

<sup>63</sup> Smith (1989, p. 55)。

<sup>64</sup> Znaniecki や Robinson は、ケース・スタディというよりも社会学全般において、分析対象から得られた知見をいかにして一般化するかにについて考察している。その際に、社会学の分析対象として「事例」を多くの箇所でもとりあげているためか、Mitchell は彼らをケース・スタディの方法論者として引用している。

<sup>65</sup> Mitchell (1983, p. 188)。

<sup>66</sup> Mitchell (1989, pp. 197-200)。

<sup>67</sup> 伊勢田 (2003)によれば、列举的帰納(枚举的帰納)の方法は「厳格な帰納法」とも呼ばれ、18世紀頃にはこれぞまさに科学の方法と考えられていた(p. 25)。

<sup>68</sup> Robinson (1951)は、逸脱事例の検討を通じて当初の仮説を修正していくプロセスにおいては、分析的帰納と列举的帰納との間で違いがないとして、Znaniecki の議論には混乱があると批判した(pp. 813-814)。

<sup>69</sup> Znaniecki (1934, pp. 185-189)。ここで Znaniecki は、列举的帰納の方法からは事前の定義に暗黙的に含まれていた性格以上のものを発見することは困難であるとして批判している(pp. 187-188)。

<sup>70</sup> Znaniecki (1934, pp. 190-199, pp. 209-277)。

のである」<sup>71</sup>と述べ、社会学における知見の一般化の方法は、分析対象の事例の典型性によるのではなく、事例から引き出された特性が当該事例において本質的であるかどうかによると主張した<sup>72</sup>。

### 1-3. Mitchell (1983) の「論理的推論」

以上の Znaniecki の主張を引いた上で、Mitchell は統計的推論と論理的推論とを以下のように説明した。すなわち、統計的推論においては、サンプルは完全に無作為に選択される手続きにしたがうことによって母集団を代表するサンプルとなり、そこにおいて得られた知見が母集団に反映される。これに対して論理的推論においては、ふたつの概念の間のロジカルな関係に関する推論は、サンプルの代表性にもとづくのではなく、サンプルにおける概念間の関係に関する説得力や論理性にもとづいて行われる<sup>73</sup>。例えば「年齢」と「結婚」との関係の関係を、統計的推論では両者のデータ間の相関関係から推論する<sup>74</sup>のに対して、論理的推論においては両者間の関係を例えば通常のライフサイクル・プロセスにおける年齢と結婚に関する実態などから考える。Mitchell は、このように2種類の推論を対比させた上で、ケース・スタディから得られた知見を一般化するための推論は後者のタイプであると主張した<sup>75</sup>。

Silverman は、このような Mitchell の主張を支持し、ケース・スタディからの一般化が可能なのは、根底にある理論が適切で、そのケースに説得力がある場合である<sup>76</sup>と述べた。同様に Worsley らは、「(ケース・スタディにおける) 一般妥当性は、その分析対象のケースが同じ種類の他のケースにおいて代表的かどうかによるのではなく、その分析におけるロジックのもっともらしさによる」<sup>77</sup>と述べている。本章では、このような論理的推論にもとづく一般化を、以後「論理による一般化」と呼ぶことにする。

## 2. 統計的一般化と分析的一般化

Yin は、ケース・スタディから得られた知見を一般化するプロセスを「分析的一般化」(または「理論へ的一般化」と呼び、Mitchell 等と同様に「統計的一般化」と対比させた。具体的には Yin は実験のメタファーを用い、科学的実験において実験結果を理論に一般化するのと同様に、ケース・スタディにおいても得られた発見物は理論に一般化される

---

<sup>71</sup> Znaniecki (1934, p. 211)。

<sup>72</sup> Znaniecki (1934)は、ある特定の具体的事例を分析した結果、その事例から得られた特性が当該事例において本質的である場合には、その特性は同じ種類の他の事例全体に共通したものであると考えることができる( p. 212)。しかし Robinson (1951)は、特性が本質的かどうかを識別することは一般に困難であるとして、本質的かどうかという点に依存する Znaniecki の方法論を批判した(pp. 817-818)。

<sup>73</sup> Mitchell (1983, p. 198)。

<sup>74</sup> ここは正確には、サンプルにおける両者間の相関関係の有意性から母集団について推測するというべきであろう。

<sup>75</sup> Mitchell (1983, p. 200)。

<sup>76</sup> Silverman (1985, p. 114)。

<sup>77</sup> Worsley, Fitzhenry, Mitchell, Morgan, Pons, Roberts, Sharrock and Ward (1970, p. 120)。

べきであるとし<sup>78</sup>、その手法として、追試の論理（ふたつ以上のケースが同じ仮説や理論を支持すること<sup>79</sup>）を用いて、複数の類似のケースにおいて発見物のテストを繰り返す方法を提案した。このようなテストを繰り返すことを通じて、発見物は実際に追試を行ったいくつかのケースを超えて、はるかに多くの類似したケースにおいて受け入れられるだろうと Yin は主張し<sup>80</sup>、ケース・スタディを用いた研究の外的妥当性を高める方法として、このような一般化の方法を分析的一般化と呼んだ。

この分析的一般化という考え方は、ケース・スタディの方法論に関心を寄せる近年の多くの研究者によって支持されている<sup>81</sup>。

### 3. 批判的検討

#### 3-1. ケースにおける現象と文脈

ここで本章では、ケース・スタディにおいて、(1) そこで取りあげられる現象と、(2) その現象を取り巻く文脈、とを識別して議論する枠組みを導入したい。すでに本章第2節で見たように、ケース・スタディとは、現象と文脈とが一体不可分である状況に適した研究方法なのであるから、本来ケースにおける現象と、これを取り巻く文脈とを識別することは困難であると思われる。しかしここではこれ以降の議論を整理するために、あえてこのような枠組みを導入する。なお、ここではケース・スタディにおける文脈とは、「それぞれのケース・スタディにおける分析単位を規定する特性または構造」<sup>82</sup>と定義する。Sjoberg らは、この例として、特定の個人、コミュニティ、組織、国、文明、などをあげている<sup>83</sup>。マーケティング研究の場合には、これら以外に特定の企業やプロジェクト、製品、業界、意思決定、などが含まれるであろう。

なお、現象と文脈とを識別して議論する本章の枠組みは、Pettigrew が提唱する「文脈主義の方法論による時系列比較ケース分析」<sup>84</sup>の枠組みに立場に近い。Pettigrew は、文脈主義(contextualist)の考え方をケース・スタディに導入し、まず文脈に埋め込まれた現象を全体的に捉えた上で、次にその現象と文脈との間の相互関係を分析し、最終的には当該文脈条件の下での当該現象に関する因果関係を理解することを目指すとしているが<sup>85</sup>、本章で提案するケース・スタディの方法論においてもこれと同様に、現象と文脈との関連に留意しつつ、文脈から現象を識別する。すなわち、当初文脈と現象とを一体のものとして包括的に捉えるところからケース・スタディを開始し、最終的には当該現象を説明する

---

<sup>78</sup> Yin (1984, p. 43)。

<sup>79</sup> Yin (1984, pp.43-44)。

<sup>80</sup> Yin (1984, p.50)。

<sup>81</sup> Eisenhardt (1989)、Miles and Huberman (1994)、坂下 (2004) など。

<sup>82</sup> Sjoberg, Williams, Vaughan and Sjoberg (1991, p. 36)。

<sup>83</sup> Sjoberg, Williams, Vaughan and Sjoberg (1991, p. 36)。

<sup>84</sup> “a research strategy incorporating the longitudinal comparative case method underpinned by a contextualist theory of method” (Pettigrew, 1990, p. 271)。

<sup>85</sup> Pettigrew (1990, p. 269)。ただし Pettigrew がこの方法論によって捉えようとした現象は、何らかの「変化」に限定されていた。

仮説を、当該仮説を取り巻く文脈条件から識別して特定することを目指すものである。

### 3-2. 論理による一般化と分析的一般化

この枠組みを用いて考察すると、Yin が提示した「分析的一般化」と、それより以前の Mitchell らによる「論理による一般化」とは、焦点が異なる概念であるように思われる。なぜなら、Mitchell らによる「論理による一般化」の概念が、ケースから得られた仮説自体の論理の説得力に焦点を当てる<sup>86</sup>のに対して、Yin が提示した「分析的一般化」とは、複数の類似ケースを用いてテストを繰り返すことを通じて仮説があてはまる対象ケースを拡げていくプロセスであることから推察されるように、仮説自体の説得力よりも、その仮説の「あてはまり」、つまり仮説を取り巻く文脈の方に焦点を当てるからである。

Mitchell (1983)があげた例を用いれば、「論理による一般化」においては、「なぜ年齢があがるほど既婚率が上がるのか」のように、年齢と結婚とを結びつけるロジックに焦点を当て、その説得力が高いほど仮説の一般化可能性が高いと考えるのに対して、「分析的一般化」では、年齢があがるほど既婚率が上がるという現象が観察される他の複数ケースを探して比較しながら、「どのような状況では年齢があがるほど既婚率が上がるのか」という分析を続ける。すなわち仮説が成立する文脈条件に焦点を当てるのである。

したがって、Yin が言うところの「追試」に用いられる「特定の現象が発見される条件」を有するケース<sup>87</sup>とは、現象を取り巻く文脈条件が類似したケースを意味していると考えられる<sup>88</sup>。つまり Yin が主張した「分析的一般化」のプロセスとは、文脈において類似した複数のケースを用いて仮説のテストを繰り返すことによって、当該仮説があてはまる文脈条件についての知識を蓄積・洗練させていくプロセスである<sup>89</sup>と考えることができる。

### 3-3. 代表的ケースと逸脱的ケース

すでに見たように、ケース・スタディからの一般化の可能性をめぐる議論においては、長らくこの問題はケースの代表性（または典型性）の問題として定位されてきた。

この問題に関して沼上は、「代表性の高い事例を選択することによって（ケース・スタディの）外的妥当性を高めることは可能であろうが、この外的妥当性の向上は極端事例から得られる理論創出や発見の重要性とは相容れないものである」<sup>90</sup>と述べ、代表的なケースからは新たな発見がもたらされる可能性が少ないとして批判した。実際に、Pettigrew や Sjoberg らのように、ケース・スタディにおいて逸脱的で極端なケースこそ取りあげら

<sup>86</sup> 先に検討した Znaniecki による分析的帰納は、事例から得られた知見の本質性に着目するが、知見を取り巻く文脈より知見自体に着目することから、「論理による一般化」に近い立場であると思われる。

<sup>87</sup> Yin (1984, p. 63)。

<sup>88</sup> 例えば「類似した近隣」(Yin, 1984, p. 50)という表現は、「紳士化」という現象が観察されるケースに関して、その背後の文脈条件において類似するケースを意味すると思われる。

<sup>89</sup> ただし、もちろんこの間に仮説自体に対しても修正と検証を加えていく(Yin, 1984, p. 149)。

<sup>90</sup> 沼上 (1995, p. 62)。

れるべきであると主張する論者も多い<sup>91</sup>。

しかし、本章が提示する枠組みの見地からは、このようなケースの「代表性」や「逸脱性」に関する議論は、それがケースの現象や仮説に関しての議論なのか、あるいはケースの文脈に関しての議論なのかが十分に整理されてこなかったために、やや混乱していると評価される。

例えば、古くから議論されてきた「ケース・スタディの外的妥当性を高めるために代表的ケースを選択すべき」という主張については、この場合の代表性とは当該ケースの文脈に関わるものであると思われる。なぜなら文脈条件の代表性が高いほど、そのケースから得られた知見は、多くの類似文脈のケースにおいて当てはまる可能性が高いからである。反対に文脈条件が逸脱的であるケースについては、その外的妥当性は低いであろう。

他方で沼上が述べた「代表的ケースからは発見が期待できない」という批判における代表性とは、そのケースにおける現象、またはその現象から得られる仮説に関わるものであると考えられる。なぜなら現象が代表的であるケースとは、要するによくある現象をとりあげたものであり、そこから新たな発見や仮説が産み出されることは期待できないと思われるからである。これとは逆に、現象や仮説が逸脱的であるケース（例：異常な売上げを見せた新製品、など）からは、新たな発見がもたらされる可能性がある。

つまり「代表的ケースでなければ知見を一般化できない」という見解と、「逸脱的ケースでなければ新たな発見が期待できない」という見解とは、前者が文脈に関する指摘であり、後者が現象または仮説に関する指摘であると考えれば、相互に矛盾はしないのである。

以上の議論は、図表3のように整理される。ケースにおける代表性と逸脱性の議論は、現象から得られる仮説と、その背後の文脈条件とを以上のように識別して検討することによって、若干の整理がなされるように思われる。

図表3 代表的ケースと逸脱的ケース

	代表的	逸脱的
現象	×	発見可能性
文脈	一般化可能性	×

<sup>91</sup> 逸脱的または例外的なケースを選択すべきとする同様の主張は、Eckstein (1975, pp. 119-120)、Mitchell (1983, pp. 203-204)、Pettigrew (1990, pp. 275-276)、Robinson (1951, pp. 813-814)、Silverman (1985, pp. 21-22, p. 140)、Sjoberg, Williams, Vaughan and Sjoberg (1991, pp. 61-63)、Znaniecki (1934, p. 240)等にも見られる。



### 3-4. ケース・スタディからの一般化

以上に提示した観点からは、Yin が提示し、多くの研究者が支持している「分析的一般化」という概念には、内容においてなお不明な部分がある。例えば Yin は、「どのようにしてケース・スタディを理論に一般化することができるか」<sup>92</sup>として、ケース・スタディからの一般化の方法を、ニューヨークの都市計画に関する単一ケースを例にあげて説明している。Yin によれば、このケースはニューヨークでの経験のみにもとづいて作成されたものだったにもかかわらず、舗道や公園の役割、施設や街区の必要性、スラム化など、都市計画に関するより広い理論的課題を扱っていたために、他の都市におけるケースを検討するための媒介物となり、その理論は都市計画の分野での重要な貢献を果たしたという。

しかしすぐにわかるように、このニューヨークのケース・スタディで得られた仮説が他の都市においても当てはまるか否かは、その仮説の内容に対して（1）「ニューヨークであること」という文脈条件がどの程度の影響を及ぼしているか、および、（2）他の都市の文脈条件がニューヨークとどの程度類似しているか、というふたつの要因に依存する。

例えば「ニューヨークでは舗道を拡充したら交通事故が減少した」という現象が観察された場合には、そこから産み出される「舗道を拡充すると交通事故が減少する」という仮説に対して、「ニューヨークであること」という文脈条件がどの程度影響を及ぼしているか、という検討がなされなければならない。この場合、もし仮説に及ぼす文脈条件の影響が小さければ、その仮説は他の多くの都市に当てはまる可能性が高いし、逆に「ニューヨークであること」という文脈条件と仮説が密接に関連していれば、その仮説はニューヨークと類似の文脈条件を有する都市のみに当てはまるであろう。

さらに、この議論はただちに「ニューヨークであること」という文脈条件とは、この都市がもつさまざまな特性のうちどの要因に規定されるのか、という分析の必要性につながる。文脈条件（例：ニューヨークであること）を規定する要因（例：運転が非常に荒い）が特定されれば、類似の要因を有する文脈に置かれているケース（例：上海）には、当該仮説が当てはまる可能性が高い。したがって、もし類似の文脈に置かれたケースが多数存在する場合には、それらのケース群の範囲において、当該仮説を一般化できる可能性が高い。

このように、ケース・スタディから得られた仮説を一般化するためには、仮説と文脈とを識別して議論することが重要であると本章では考える。しかし Yin は「分析的一般化」に関してその詳細を述べていないため、上記のニューヨークの単一ケースの例によっても、依然として「どのようにしてケース・スタディを理論に一般化することができるか」は、実際のところ明確になってはいない。

沼上は、このような Yin の「分析的一般化」の概念に対して、内的妥当性（ある事例で観察された現象を説明できる他の代替的な理論が排除されている程度<sup>93</sup>）を高めるもので

---

<sup>92</sup> Yin (1984, p. 51, ボックス 7)。

<sup>93</sup> 沼上 (1995, p. 56)。

はあっても外的妥当性を高めるものとはいえない<sup>94</sup>として批判したが、Yin によって分析的一般化の概念が十分に説明されていない以上、このような批判を避けることはできないと思われる。

しかし本章で提示した枠組みによって、分析的一般化を「ケースにおいて得られた仮説を、類似の文脈条件を有する他のケースに一般化すること」と解するならば、分析的一般化のプロセスはケース・スタディの外的妥当性を高めるために有効であると主張することも部分的には可能であろう。

本節のここまでの考察をまとめれば、ケース・スタディからの知見の一般化を巡って従来提出されてきたふたつの代表的な立場である「論理による一般化」と「分析的一般化」とは、前者が現象に関する仮説の説明力に焦点を当てる一方で、後者は現象の背後にある文脈の類似性に焦点を当てる概念であると位置付けることができる。また、ケース・スタディから得られた知見を一般化するためには、この両方ともが必要であると要約することができる。

#### 4. 本章におけるケース・スタディの位置付けと「文脈への一般化」

本章の検討を踏まえて、われわれはケース・スタディとは以下のような研究方法であるという暫定的な結論に達する。

「ケース・スタディとは現象と文脈とが不可分である状況において適する研究方法である。ケース・スタディには、記述型ケース・スタディ、理論産出型ケース・スタディ、理論検証型ケース・スタディがあり、この順に研究を進めることが望ましい。これらのうち理論産出型ケース・スタディの実施プロセスにおいては、まず現象と文脈とを一体のものとして捉え、次に現象と文脈との相互関係を分析し、次いで現象を説明する仮説と文脈条件との関係を理解した上で、その文脈条件を規定する要因を特定し、最終的には類似の文脈条件を有する他のケースへ仮説を一般化する。」

以上のうちで、最後に述べた「類似の文脈条件を有する他のケースへの仮説の一般化」のプロセスは、ケース・スタディからの知見の一般化の問題に対して本章が提示するひとつの回答であり、内容の詳細が不明な Yin の「分析的一般化」を、本章の枠組みを用いて補足・修正したものである。本章ではこれを、「文脈への一般化」と呼ぶことにする。

#### 第5節 むすびにかえて

ケース・スタディの方法論に関しては、本章で取りあげた論点以外にも、単一ケースと複数ケースの問題やケースの分析単位に関する論点、データ分析の方法、理論産出の方法、

---

<sup>94</sup> 沼上 (1995, p. 63)。

などの多くの重要な論点がある。これらについては、字数の制約のために本章では取りあげることができなかったが、いずれもケース・スタディという研究方法を適切に運用するためには非常に重要な論点である。これらについては、またいずれかの機会に稿を改めて論じてみたい。

## 参考文献

- Alam, Ian (2005), "Fieldwork and data collection in qualitative marketing research," *Qualitative Market Research: An International Journal*, 8(1), 97-112.
- Anderson, Paul F. (1983), "Marketing, Scientific Progress, and Scientific Method," *Journal of Marketing*, 46, 18-31.
- Blumer, H. (1969), *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall (後藤将之訳『シンボリック相互作用論-パースペクティブと方法』勁草書房, 1991年).
- Bonoma, Thomas V. (1985), "Case Research in Marketing: Opportunities, Problems, and a Process," *Journal of Marketing Research*, 22, 199-208.
- Dyer, W. Gibb Jr. and Alan L. Wilkins (1991), "Better Stories, Not Better Constructs, To Generate Better Theory: A Rejoinder to Eisenhardt," *Academy of Management Review*, 16(3), 613-619.
- Eckstein, Harry (1975), "Case Study and Theory in Political Science," in Fred I. Greenstein and Nelson W. Polsby (Eds.), *Handbook of Political Science*, vol. 7: *Strategies of Inquiry*, Reading, MA: Addison-Wesley, 79-137.
- Eisenhardt, Kathleen M. (1989), "Building Theories from Case Study Research," *Academy of Management Review*, 14(4), 532-550.
- 藤澤三佳 (1995), 「現代のシンボリック相互作用論者-A・ストラウス」『シンボリック相互作用論の世界』船津衛, 宝月誠編, 恒星社厚生閣, 61-72.
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss (1967), *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago, IL: Aldine (後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳『データ対話型理論の発見』新曜社, 1996年).
- Gummesson, E. (2002), "Relationship marketing and a new economy: it's time for de-programming," *Journal of Service Marketing*, 16(7), 585-589.
- Hage, Jerald (1972), *Techniques and Problems of Theory Construction in Sociology*, New York, NY: John Wiley and Sons (小松陽一, 野中郁次郎訳『理論構築の方法』白桃書房, 1978年).

- Hunt, Shelby D. (1976), *Marketing Theory: Conceptual Foundations of Research in Marketing*, Columbus, OH: Grid Publishing (阿部周造訳『マーケティング理論-マーケティング研究の概念的基礎』千倉書房, 1979年).
- 伊勢田哲治 (2003), 『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会.
- 木下康仁 (2005), 「序章」『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』木下康仁編, 弘文堂, 15-22.
- Kuhn, Thomas S. (1962), *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago, IL: University of Chicago Press (中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年).
- Leonard-Barton, Dorothy (1990), “A Dual Methodology for Case Studies: Synergistic Use of A Longitudinal Single Site with Replicated Multiple Sites,” *Organization Science*, 1(3), 248-266.
- Miles, Matthew B. (1979), “Qualitative Data as an Attractive Nuisance: The Problem of Analysis,” *Administrative Science Quarterly*, 24(4), 590-601.
- Miles, Matthew B. and A. Michael Huberman (1994), *Qualitative Data Analysis: An Expanded Sourcebook*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage.
- Mitchell, J. Clyde (1983), “Case and Situation Analysis,” *The Sociological Review*, 31, 187-211.
- 森岡崇 (1999), 「グラウンデッド・セオリーがワクワクするのはなぜ?」, Strauss, Anselm and Juliet Corbin(1990), *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage Publications (操華子・森岡崇訳『質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順第2版』医学書院, 1999年, 361-374).
- 沼上幹 (1995), 「個別事例研究の妥当性について」『ビジネスレビュー』42(3), 55-70.
- Pettigrew, A. M. (1990), “Longitudinal Field Research on Change: Theory and Practice,” *Organization Science*, 1(3), 267-292.
- Robinson, W. S. (1951), “The Logical Structure of Analytic Induction.” *American Sociological Review*, 16, 812-818.
- 戈木グレイヒル滋子 (2005), 『質的研究方法ゼミナール: グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ』医学書院.
- 坂下昭宣 (2004), 「エスノグラフィー・ケーススタディ・サーベイリサーチ」『国民経済雑誌』190(2), 19-30.
- Silverman, David (1985), *Qualitative Methodology and Sociology: Describing the Social World*, Aldershot, UK: Gower.
- Sjoberg, Gideon, N. Williams, T. R. Vaughan and A. F. Sjoberg (1991), “The Case Study Approach in Social Research,” in Joe R. Feagin, Anthony M. Orum and Gideon Sjoberg (Eds.), *A Case for the Case Study*, Chapel Hill, NC: The University of North

- Carolina Press, 27-79.
- Smith, N. Craig (1989), "The case study: a vital yet misunderstood research method for management," in Roger Mansfield (Ed.), *Frontiers of Management*, New York, NY: Routledge, 50-64.
- Stebbins, Robert A. (2001), *Exploratory Research in the Social Sciences: Qualitative Research Methods*, Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Strauss, Anselm and Juliet Corbin (1990), *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: Sage Publications (操華子, 森岡崇訳『質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 第2版』医学書院, 1999年).
- Worsley, Peter, Roy Fitzhenry, J. Clyde Mitchell, D. H. J. Morgan, Valdo Pons, Bryan Roberts, W. W. Sharrock and Robin Ward (1970), *Introducing Sociology*, Harmondsworth, UK: Penguin Books.
- Yin, Robert K. (1981), "The Case Study Crisis: Some Answers," *Administrative Science Quarterly*, 26(1), 58-65.
- Yin, Robert K. (1984), *Case Study Research* 2nd edition, Thousand Oaks, CA: Sage Publications (近藤公彦訳『ケース・スタディの方法 (第2版)』千倉書房, 1996年).
- Zaltman, G., K. LeMasters and M. Heffring (1982), *Theory Construction in Marketing*, New York, NY: John Wiley and Sons.
- Znaniecki, Florian (1934), *The Method of Sociology*, New York, NY: Rinehart (下田直春訳『社会学の方法』新泉社, 1978年).